

瀬戸内海のエコツーリズムの課題と展望

一般社団法人 瀬戸内海エコツーリズム協議会 理事長

上 嶋 英 機

(広島工業大学 客員教授)

1. はじめに

エコツーリズム推進法が2008年に設立して17年となる。2015年には本誌の69号に特集「瀬戸内海におけるエコツーリズム」が掲載された。この中で筆者は、「瀬戸内海のエコツーリズム推進と地域創生への貢献」をテーマに、エコツーリズムが瀬戸内海的环境政策や地域活性に対しどのように役立つのか、エコツーリズムの理念や具体的な活動について紹介した。

本稿では、①2015年以降に実施してきたエコツーリズムの活動の中から、瀬戸内海の島々の環境資産を活用したエコツアーの造成について紹介する。②また、最近の国内エコツアーの動向と課題について考え、瀬戸内海の潜在価値に対する国際的な評価について再認識し、世界にどのように魅力を発信すべきかを提案する。更に、③瀬戸内海の緊急的課題である急激な無人島化に対応する政策として、エコツーリズムの理念を基本とした環境再生事業について西瀬戸の「八島」をモデルとして具体的な事業計画を紹介する。瀬戸内海の魅力を維持し、自然や歴史文化資産の継承を担うためエコツーリズムを駆使した事業について提案したい。

2. 瀬戸内海エコツーリズム振興の歩み

瀬戸内海におけるエコツーリズムの活動母体として、「一社・瀬戸内海エコツーリズム協議会(略:瀬戸エコ協)」を2010年に設立した。以来、瀬戸内海自然环境や歴史文化を体感し守るためのエコツーリズムの活動を展開してきた。具体的には、瀬戸内海の国立公園を含む島嶼部において、自然と歴史文化資産をコンテンツとした個性的なエコツアーを造成し瀬戸内海全体でネットワーク化していき、瀬戸内海の多様で高質なエコツアーを体感し、満喫して頂くことを目標とした。

瀬戸エコ協は2020年には設立10周年を迎えた。これまで、広島湾をスタート点にして、国立公園であり世界文化遺産の「宮島」中心にエコツアーを展開し、広島湾南部の湾口部に連なる「防予諸島」、白砂青松地である「室積海岸」と伊予灘の島々、広島湾東部海域では安芸灘諸島の蒲刈島から大崎上島に連なる「とびしま海道」。そして、瀬戸内海の魅力を圧縮した「八木灘」海域のエコツアー。瀬戸内海の海洋哺乳類「スナメリ」の追跡や、瀬戸や海峡で発生する渦潮を体感するエコツアーを造成した。以下に、主なエコツアーについて紹介する。

2.1 「宮島エコツーリズム推進全体構想」の活動

宮島では2017年に「宮島」エコツーリズム推進協議会が発足し、2020年9月には「エコツーリズム推進法」に則り、環境省を主体に4省による「宮島エコツーリズム推進全体構想」が認定された。その基盤造りのため、環境省の「エコツーリズム地域活性化支援事業」を活用しエコツアー運用と全体構想を構築した。エコツアー造成には、宮島の山間部域や沿岸海域の自然資源と、歴史文化財の宝庫である神社仏閣と町家を中心とした個性的なエコツアーが造成される。その中で、宮島の沿岸域一周の7か所に配置された神の

島「宮島」を礼拝する神社を巡る「宮島七浦巡り」が、宮島の海と島を体感する最も高質なエコツアーとなっていて人気が高い。



図-1 神の宮島を巡る船のエコツアー「七浦巡り」

2. 2 スモール瀬戸内海「八木灘」のエコツアー

2020年には観光庁の新たな観光戦略として「誘客多角化等のための魅力的な滞在型コンテンツ造成」実証事業に採択された。その事業は瀬戸内海中央部の安芸灘諸島と安芸津、竹原に囲まれた「八木灘」の資源をコンテンツとしてエコツアーを造成し市場への展開を図った。

八木灘は江戸時代以降からの海運業や漁業が盛んで瀬戸内海を象徴する海事文化を築いてきた海域である。現在、「八木灘」の名称は海図から消えているが、今でも瀬戸内海の代表的な自然景観や風土、そして造船、塩田、酒造、漁業の文化歴史が豊富に詰まっている。いわゆる「スモール瀬戸内海」が「八木灘海域」である。この中で多種多様なエコツアーのテーマやストーリーが造成され、高価値な滞在型のエコツアーが堪能できる。特に、竹原の塩田文化と古都(重要建造物)との繋がりと、軟水による酒造は世界に誇れるもので、絵画や近代アートと海事文化とのコラボは高質なエコツアーを造成した。



図-2 「スモール瀬戸内海～八木灘エコツアー」

2. 3 「渦潮と来島海峡」のエコツアー

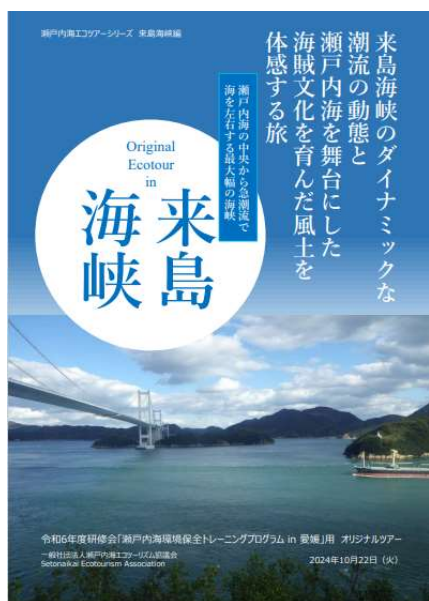


図-3 来島海峡エコツアー
瀬戸内海中央の海峡

瀬戸内海の自然や歴史文化価値は前記したように、海外旅行者の評価が高い。しかしながら、そのためのエコツアーのメニューや実施体制が整っていない。瀬戸内海のエコツアーを専門に企画運用している旅行社は存在しない。そこで、「瀬戸エコ協」では西瀬戸から東瀬戸に向けエコツアーを造成しているが、今回、瀬戸内海中央の「来島海峡」中心として自然と歴史文化資産を駆使したエコツアーを造成する機会を得た。本誌の出版元である「公社・瀬戸内海環境保全協会」の R6 年度研修会「瀬戸内海環境保全トレーニングプログラム in 愛媛」において、「瀬戸内海のエコツーリズムで学ぶ～来島海峡の歴史と魅力～」をテーマとして、来島海峡で初めてのエコツアーを実施した。ツアーコンテンツとして①来島海峡の渦潮を体感。②瀬戸内海中央部の景観と海峡の機能を知る。③水軍時代の足跡と貢献した風景。④「小島」上陸による日露戦争時代の芸予要塞の实在と建築の芸術性の体感。⑤波止浜の造船町の歴史と海事文化など、1日コースであるが来島海峡の意義と瀬戸内海の魅力を十分に堪能することができた。

3. 国内のエコツアーの動向と課題

さて、2023年以降コロナ禍の閉塞的な時代を過ぎて、その反動もあって一気に人々の交流が躍動化し、国内外の旅行者が交流する多様な観光ツアー産業が誕生した。これまで主流であった団体ツアーを基本とする大量送客型のマスツーリズムから、少人数で個人志向のストーリー性のあるエコツーリズム型の旅が増えてきた。しかも地域の高価値な自然や歴史文化を体感として組み込んだマイクロツアーが誕生してきた。そこには、近年急激に増加してきた欧米からのインバウンドの要望の影響が大きい。このように、高価値なエコツアーに対する要求が高まり、エコツーリズム先進国の同様なレベルに達しつつある。エコツーリズムの理念である「自然環境保全に配慮しながら自然環境や歴史文化を体験し学ぶとともに、環境保全や地域振興に貢献する観光のあり方」を具現化するエコツアーが観光市場に実在してきたことは大きな進歩である。しかし、エコツアーがまだ試行的なレベルで、高価値な品質を持つエコツアーになっていない。更に、感動的なツアーをプロデュースするインタプリターの人材育成が大きく遅れている。更に、島嶼部の歴史文化(祭事)やエピソードを継承する「語り部」や有識者が高齢化により不在となり大きな損失となっている。早急に瀬戸内海全域で歴史文化資産(プロパティ)の管理と継承の作業が必要である。一方、瀬戸内海でのエコツーリズムを推進する上で、自然資産(生態系・景観)や歴史文化資産の価値(クオリティ)の管理と継承が不可欠であるが、無人島化の影響を受け現状では資産価値の把握がなされていない。

そこで、改めて瀬戸内海における高質なエコツーリズム振興のための重要な要素(コンテンツ)となる価値や管理の課題について考えてみたい。

4. 「瀬戸内海」のエコツーリズム的価値の認識と評価

エコツアー造成の要素(コンテンツ)となる瀬戸内海の自然環境や歴史文化の資源価値をどの様に評価してその魅力を海外に紹介し、多くの方に瀬戸内海を体感して頂き、そして満喫して頂けるかが瀬戸内海の価値を将来に継続するためには不可欠である。それではここで「瀬戸内海」とは海外から見てどのような

魅力があり、評価されているのかを改めて確認したい。

4. 1 瀬戸内海の価値の認識と発信

多くの灘や湾、瀬戸、島嶼部で構成されている「瀬戸内海」が一つの纏まった内海として概念的に定義されたのは江戸時代後期とされる。それまでは豊後灘、安芸灘などの灘単位での個々の海域と対応していた。現在の「瀬戸内海」の概念が定着したのは、幕末期から明治時代になって日本に訪れた欧米人がこの海域を「The Inland Sea」と呼んだことが契機とされている。それ以前の江戸時代においては、シーボルトの「江戸参府紀行」で瀬戸内海が賞賛され、リヒト・ホーフエン(シルクロード命名者)の「中国日記」で瀬戸内海の景観が評価された。このように世界に瀬戸内海が認知されるようになったのは国外からのツーリストによる貢献が大きい。

最近では、2019年正月にニューヨークタイムスの記事により「2019 年に行くべき52の場所」の中の第7番目に日本で唯一、「瀬戸内海諸島」が選出された。その評価の根拠は瀬戸内海が「アートと自然と平和が調和する日本の内海」であった。このアートは瀬戸内海中央の直島を中心とする「現代アート」の創作によって自然との調和を図り、新たな価値をイノベーションして地域を活性化した。このように海外からの瀬戸内海の評価は絶大であるが、日本から世界に向けての瀬戸内海の自然と歴史文化資産価値を紹介するエコツアーの情報発信は意外と少ない。

4. 2 瀬戸内海国立公園の活用と評価

一方、瀬戸内海の自然資源、景観や風土(文化的景観)を保護管理しているのが「瀬戸内海国立公園」である。1934年に設立して90年が経過した。瀬戸内海の資源価値や魅力を世界に発信することが瀬戸内海国立公園の意義である。環境省においては、2016年に国立公園満喫プロジェクトが開始された。ナショナルパークとして魅力的なコンテンツをブランド化し、訪日外国人に上質なエコツアーを造成して提供していくことを目指している。瀬戸内海国立公園においてもこのプロジェクトを活用して世界に発信することが不可欠であるが、90年を経過したこの機会に瀬戸内海国立公園の自然資源や景観の価値を再評価する必要がある、関連施設の更新も求められる。

4. 3 海外へのアピールとネットワーク

各国との交流において瀬戸内海の魅力的な自然と歴史文化資産の紹介をするネットワークが必要である。このためには、エコツーリズムの活動を多様に取り込んでいる世界遺産関連機関やエコツーリズム関係の機関との連携が不可欠である。具体的には、ジオパーク、ナショナルトラスト、ナショナルパークの機関は、体感的なエコツアーを主体としたエコツーリズム活動と密着しているためである。これらのネットワークと瀬戸内海の関連機関が連携することが必要である。

5. 瀬戸内海の緊急課題とエコツーリズムによる環境再生

エコツーリズムを通して、瀬戸内海の自然資源や文化遺産を満喫して頂くためには、現在の瀬戸内海が抱える課題について解決する再生事業が必要である。今一番の課題は瀬戸内海の島々の無人島化が急激に進んでいることである。

その一例として上関町沖の「八島」では、最盛期に669人の島民が現在では高齢者の方が10名程度に激減し実質的には無人島化した状態になった。このため島の生活機能が停止状態になり、農業、漁業の生産基盤は無くなった。また、島民不在では伝統的祭事や歴史的建造物の管理や継承は不可能となり断絶される。このままでは定期船等の交通機関も停止され、島全体が孤立していく。このため無人島化した島を再生する政策や事業が不可欠となる。そこでエコツーリズムを活用して自然環境資源や歴史文化資産を如何に継承していくかのモデル事業が必要である。

6. 「エコツーリズム」による無人島の再生事業

6. 1 フランスの無人島「ケメネス島」再生事業

無人島再生の実例として、フランス北西部ケルト海域に位置する無人島化した「ケメネス島」を、エコツーリズムによる活性化プロジェクトを実施して復活させた事業を紹介する。

「ケメネス島」はフランス北西部ケルト海域に位置する東西 1.3km、面積 26ha の小さな無人島である。この島をエコツーリズムによって資源循環型の島(エコアイランド)に復活させた。この島はかつて営農者が住み、農場や生活建造物が存在していたが、2000 年に無人島として放置された。この再生事業には仏国などの 5 ヶ国が参加する組織体「ISLA プロジェクト」が担ってきた。2003 年には ISLA のメンバーであるフランスのナショナルトラスト「沿岸域保全整備機構(CDL)」がケメネス島を保護のため購入し、無人島化を解消する上で島民を居住させ、その生活基盤(生業)を確保することを最優先しエコツーリズムを活用した島内の経済的仕組みと、エコアイランドを目指す社会システムが構築された。具体的には、島内に移住する若者の公募を行い、若い夫婦と子供の家族4人を採用し、島の運用管理をこの夫婦に任した。生活の経済的基盤としてエコツアー客を受け入れ、有機農法などの「循環型農業」の実施、水処理施設と有機物排出処理により水の循環活用を行う。自然再生エネルギー(バッテリー)は自給自足と耕作機械に活用する。農業はオーガニックラベルの野菜や羊の生産を行ってネット販売を行う。島への交通は電動タクシーボートを使用しエコアイランドの象徴として活用している。正に全体を通して SDGs の実践でもある。

6. 2 エコツーリズムによる八島再生プロジェクト



図-4 八島
「八島再生プロジェクト」

そこで、「ケメネス島」を手本にした無人島再生に向け「八島」を対象に活動が開始された。2015 年に元島民の依頼を受けて八島の資源調査を行い、八島の貴重な自然資源を紹介する「エコマップ」が作成された。その後、八島出身の島民の方が中心になって無人島再生活動の支援者による「一般社団法人・せとうち・エコアイランド八島」が 2022 年に設立された。

その具体的な活動は、定住者の生活を支えるため島内資源を活用したエコツーリズムの運用と経済的基盤を確保する。それにより、島内資源の管理と継承を図る。エコアイランドとして島内は資源循環を基本とし、①沿岸域を自然育養型の近代漁場に再生し、②エコツーリズムの活動拠点として海洋スポーツ、キャンプ場の整備③自然再生エネルギーを生産して自給運用する。④無人の廃屋の処理と新たな活用。⑤沿岸域の漂着ごみの処理と再利用。⑥田畑の遊休地を新たな生産場に転用する事業。以上が八島再生プロジェクトの構想である。このプロジェクトを実現し新たな瀬戸内海の風景として世界に示すことができれば意義深い。

7. 終わりに

瀬戸内海の貴重な自然や歴史文化の財産を継承し、エコツーリズムの活動からその価値を多くの方に満喫して頂くことで瀬戸内海が世界に愛される内海となって欲しい。そのモデル事業として「八島再生プロジェクト」が実働し成果を得るには多くの支援が必要である。